



## 特集 宗教と政治

報告1・座談会

宗教と政治 世界平和統一家庭連合（旧統一協会）問題を手がかりに

（2022年11月28日、主催 日本カトリック正義と平和協議会 改憲対策部会）

講演 島蘭 進（東京自由大学学長）

<講演の要旨>

### 1 旧統一協会の問題点

ジャーナリストの藤田庄市氏は、カルト問題を①生命の破断、②性虐待、③暴力的布教、④児童虐待、⑤金銭収奪、⑥正体隠しの詐欺的布教、に整理している。だが、エホバの証人や顕正会など、これらに必ずしも当てはまらないものの、社会的問題の指摘される教団も存在し、

線引きは困難である。それでも旧統一協会の存在は際立っており、人権侵害が頻繁に、長期間行われている。大きな事件を引き起こしたオウム真理教は、設立されてから崩壊するまで10年に過ぎないが、旧統一協会はすでに60年近く活動している。

こうした旧統一協会の攻撃性は1980年代にピークを迎えた。80年代、旧統一協会は日本を

搾取の対象と位置付けた。80年代は日本の経済成長期にあたり、韓国は未だ貧しかった。そうした日韓の格差が反映していると考えられる。

旧統一協会の教義には、原罪を強調し、エバが悪魔と交わってその罪をアダムに伝えたとする考え方がある。従って原罪の原因は女性にあり、罪は教祖が選んだ相手と結婚をすること、すなわち「祝福」によって解かれるとする。特に日本に対しては「韓日祝福」という韓国人男性と日本人女性の結婚が勧められ、7,000人の日本人女性が韓国に嫁いだと言われている。

元々、「新宗教」と言われる宗教、例えば天理教などもさまざまに問題視されてはきたが、開放性、現世肯定性に特徴があった。ところが70年代にはいると、現世否定的で、閉鎖的な教団が活発化してきた。それらは必ずしも社会に対して攻撃的とは言えないが、オウム真理教や旧統一協会は際立って攻撃的だったと言え、とりわけ旧統一協会は、信徒数を急速に拡大し、その財を取り込んでいった。ところが旧統一協会は、警察からの取り締まりもマスコミからの批判も限界あるものにとどまった。証明することは困難だが、これは政治家が守ったのではないかと考える。

## 2 旧統一協会と政界とのつながり

60年代に勝共連合が成立する。教団本部の隣に邸宅を構えていた岸信介が、60年代から80年代に勝共連合をリードし、その影響下に福田赳夫、安倍晋太郎、中曽根康弘などがいた。

1984年7月、『文藝春秋』に、初めて旧統一協会の内部告発記事が掲載された。しかし記事が『文藝春秋』で読めるようになる一週間ほど前、執筆者の一人である副島嘉和氏が自宅付近で襲われ、二日間意識不明の重体となった。

告発記事を執筆した副島氏と井上博明氏は旧統一協会のフロント会社が発行する『世界日報』の編集局長と財務局長だった。二人はこれまでの『世界日報』の在り方を批判し、旧統一協会から独立した新聞をめざして編集局を追放された。告発記事はその経緯と旧統一協会の闇の部分の記事にしたもので、中国は共産主義だ

から、日本は植民地政策の悪事があるから両国はサタンの側にあり、いずれ世界は韓国によって統一される、といった世界像や、アメリカの文鮮明<sup>ムンソンミョン</sup>の邸宅で年4回行われる行事について書かれている。その行事には、文鮮明に向かって世界の王様が礼拝をする儀式があり、日本の天皇役の人が文鮮明に礼拝する場面もある。

『文藝春秋』の告発記事の背景には、「コリア・ゲート事件」を契機に、一部の日本の信徒による旧統一協会変革の動きがあったと見られる。「コリア・ゲート事件」とは韓国のKCIA（大韓民国中央情報部）と旧統一協会が組んで米国政界に工作し、教団の利益を図っていたことが1970年代に発覚し、文鮮明が脱税容疑で捕まった一連の事件である。文鮮明は有罪となり84年、85年と服役した。

87年、主に朝日新聞支局を狙う連続襲撃事件が発生した。「赤報隊」を名乗る犯行声明が伴う一連の事件だが、真犯人はわかっていない。しかし事件直後、「旧統一協会の悪口をいうやつは皆殺しだ」という主旨の旧統一協会名の脅迫状が、事件で使われた銃弾と同一の薬莖2個が同封され、当時の『朝日ジャーナル』編集長筑紫哲也氏宛てに届いた。『朝日ジャーナル』は86年から87年にかけて、旧統一協会についての本格的なキャンペーン記事を掲載し、朝日新聞のみならず、取引先や近隣施設に出前の大量無断注文や、7000本もの無言電話がかかってくるといった嫌がらせが起きていた。また、旧統一協会は当時韓国、日本で何件もの銃砲店を経営しており、60年代の末以降の大学の武闘化を背景に、旧統一協会にも武装グループがつくられ、武装訓練が行われていたとされる。このことから旧統一協会による犯行の疑いが高いと考える人も多い。

以上のように、80年代は旧統一協会が最も攻撃的だった時期だったにも関わらず、マスコミや警察の取り組みは限界あるものだった。副島事件についても警察はこれを殺人未遂とせず傷害事件としたことで時効が早くなり、捜査がどこまでなされたのか怪しいと元朝日新聞記者の

樋田毅氏は見ている。

89年以降、冷戦が崩壊して反共による連帯は意味を失うが、92年、文鮮明が来日し、中曽根康弘と面会する。本来、海外で犯罪歴があると日本への入国は不可能となるが、金丸信という当時の自民党の有力者が口をきいたと推察されている。その後、金丸氏が佐川急便事件で失脚すると、公安警察は旧統一協会に宣戦布告をするが、結局実行されることはなかった。

しかしその後、旧統一協会の違法性は民事裁判で次々に明らかになっていった。示談となった例も多いが、次第に、靈感商法など違法な活動による人権侵害について教団の責任が問われる判決が下される。これを背景に、96年、旧統一協会はいわゆる「靈感商法」から、信者から苛烈な献金を強要するよう方針転換し、今日に至っている。山上徹也容疑者の母親は1億5000万円と言われるが、自己破産、サラ金の利用などで、多くの信徒の生活が崩壊している。

こうしたことから2007年より刑事摘発も始まるが、旧統一協会は政界とのつながりをいっそう強化していった。すでに80年代から、自民党の議員秘書などに優秀な、主に女性信徒を送り込んでいたが、2010年以降現在まで、様々な団体を通して地方議員に接近している。安倍晋三氏は、2009年の自民党の衆議院議員選挙大敗以降急速に関係を深めていったものと思われる。

### 3 宗教と政治の関わりはどうあるべきか

旧統一協会の問題を整理すると、〈第1段階 90年代の前半まで 反共の時代〉、〈第2段階 90年代から2010年まで〉、〈第3段階 2010年以後今日まで 家族倫理強調の時代〉の3段階に分けられる。

反共と家族倫理強調は、世界の宗教右派に共通してみられるが、旧統一協会もこれらによって政治家と連携して来た。だがここには、単なるアジェンダの共有とは別の、連携による相互利益という側面がある。つまり、公益とは一切無関係の、選挙での得票数確保と勢力拡大という私利私欲、あるいは特殊利益の連携である。

このことは民主主義の危機と強くつながっている。権威主義的な政権が力を持つことを目標に、あらゆる宗教団体、権威主義的な団体を利用することは、歴史上しばしばあった。だが現在、新しい形での連携が起きている。プーチン政権とロシア正教会。アメリカのトランプ大統領とキリスト教右派、原理主義。旧統一協会と日本の右派政治との関係は、世界的な動向と重なっていると見てよい。

こうした政治と宗教の劣化に対するオルタナティブを、「公共宗教」という概念から考えてみたい。

スペイン出身の元神父で、宗教社会学者のホセ・カサノヴァは、宗教は近代の政教分離の動向のなかで私事化が起こったという世俗化論を見直す。確かに20世紀のある時期までは、宗教は公的領域から撤退し、内面性や身近な日常生活にこそ本来の役割があり、公共的領域は世俗領域であるという近代主義的な理解が広まっていった。ところがある時期から脱私事化、つまり宗教が新たに公共領域に関わってくる動きが注目される。これが一方では宗教右派的な動きに向かい、他方で、例えばカトリック教会の第二バチカン公会議以後の政治関与が挙げられる。欧米諸国では、政治にカトリック教会の発言が一定の影響を持っている。日本でも、核廃絶や脱原発の運動が、教会と一定の連携を持ちながら進められている。

キリスト教の「共通善」はひとつの鍵になる。「共通善」に近いものは仏教やイスラム教にもある。多元性を認めるということが最重要の鍵である。公共空間には多様な立場があり、多数性のなかで討議が行われ、合意が求められる。この方向に宗教界の政治関与が変わって来たということだ。

フランス革命、アメリカ独立から200年、カトリック教会は20世紀半ばに大きな舵をきり、日本の仏教界もようやく反応しかかっていると感じている。我々が求める未来は遠いかもしれないが、その方向に向かっている。

## <座談会>

**出席者：**太田英雄（さいたま教区）、久保文彦（上智大学 キリスト教人間学）、中野晃一（上智大学 国際政治学）、弘田しずえ（ベリス・メルセス宣教修道女会）、渡辺多嘉子（東京教区）松浦悟郎司教（ピース9の会呼びかけ人）司会・光延一郎神父（イエズス会 上智大学 神学）

**中野：**なぜ自民党はここまで旧統一協会をかばい、あるいは頼ってきたのか？もちろん勝共連合で重なっており、資金的な強みについての指摘もあるが、たとえば1995年頃公安も動こうとした時、どうして旧統一協会はこの動きを止めることが出来たのか？

**島藺：**95年についての情報を持ってないのだが、2007年から刑事事件が入り、「新世」という会社やいくつかの教会に捜査が入り、次は教団本部、と予想されていたのに、そこで打ち切られた。それについては、政界のキーパーソンのような人にあらゆる手段で近づいていたことが指摘されている。60年代、70年代は岸信介氏の意向が強かった。84年の『文藝春秋』の事件以後も岸氏の隠然たる勢力があったと思う。

**弘田：**私が最初に「統一協会」を意識したのは、ニカラグアにいた時。イエズス会の経営するUCA（中央アメリカ大学）に原理研究会のようなものがあつた。勝共連合もあつた。それから、頻繁に国際的な平和会議をしていた。しかし組織が姿を現わさない。ある時、ブラジルで開催される平和会議の出席依頼があり、変だなと思い「あなたたち、旧統一協会ではないのですか？」と聞いたら、それっきり返事がなかった。結局、信徒の人たちも被害者。まさにマインドコントロールされて、自由ではない。安倍晋三氏を殺害した人も、加害者であり被害者だと思う。

**島藺：**相手の弱い所を使って、本来の意志や自由を奪う。それをどうやって法律の言葉で言う

か、今苦労しているという所だと思うが、宗教界は、新しい法律に自分たちも引っかかってしまうのではと懸念を持っているようだ。ただ旧統一協会に関しては、確かに信教の自由に関わることでもあるので、問題点が明確になるような形の法律案を作らなくてはいけないと思う。米国で文鮮明を守る運動が起こったときには、信教の自由に関わることとして反体制的な人たちも応援したようだ。私は1987年に筑波大学に就職したのだが、その頃、副学長でのちに学長にもなった福田信之氏が文鮮明を賞賛する本を書いている。多くの学者があちこちで講演をし、協力してしまったと思う。

**松浦：**確かに信徒には洗脳されて盲目的に従っている人が多いと思うが、その幹部、指導者の人たちも自分たちの教義を心底信じているのか？あるいは何か政治的な目的があつて、そのために宗教団体をつくりあげたのか？

**島藺：**教祖のためになることはよいことだという強い信念を持っていると思う。私はその信念は宗教的なものだと考える。つまり、宗教が持っている危険や可能性の酷い例だと思う。

**渡辺：**日韓関係のことが気になる。今回のことで、韓国は酷い国だというヘイトスピーチが増えているようだ。しかし日本を対象にしたことは戦争責任問題ともつながっている。日韓関係がこれから和解と平和に向かっていくために、大きな障害になるのではと懸念される。そのためにも「明治維新」以来150年の歴史の見直し、特に日本と朝鮮半島の歴史を知る必要を痛感する。旧統一協会は日本会議や神道政治連盟とも繋がっていたのか？単に安倍元首相などが両者を並行して利用していたのか？

**島藺：**日本会議のホームページには「一度も組織として連携したことはありません」と書かれている。自民党の右派が関係する集会に動員されるのは宗教関係が多く、一時は、生長の家と

旧統一協会が主な源泉だった。今は日本会議系の団体だ。明確にはできないが、旧統一協会と日本会議の両方が一緒に集会に参加することはあったという証言はあるようだ。

**太田：**日本の宗教団体調査によると、仏教系と神道系合わせて89.65%、キリスト教系が2.65%くらいという。諸派宗教に含まれるカルト的な団体は、非常に少ないにも関わらず、社会に大きな影響を与えてきたのはなぜか。

**島藺：**選挙をやると旧統一協会が動かせる票は8万票程と言われる。創価学会は世論調査では300万～400万票という。8万票はこれに比べればはるかに小さいが、極めて熱心で行動力があるので、見くびることはできない。オウム真理教は10年間でやっと1万人程度だ。実は、日本の宗教人口は『宗教年鑑』に従うと実態の2倍くらいになってしまう。神道団体は住民をみんな氏子にしており、仏教は檀家全部を信徒と数えているようだ。実際は、自分は信仰を持っていると自覚しているのは人口の25%強程度にすぎない。とはいえ宗教は、日本社会において想像以上の影響があると思う。政治家や学者、メディアは宗教についての認識が浅いと思う。

**事務局：**チャットに、旧統一協会と地方行政について、社会の右傾化と宗教のつながりについて触れた書き込みがあるが。

**島藺：**宗教二世問題についての本などを見ると、やはり人権対宗教という考え方が強い。人権を基礎に、政治、公共的領域に関与するのが「公共宗教」だが、実際には宗教と人権の間にはしばしば葛藤がある。例えば中絶の問題、女性の権利など、相当深い問題だ。宗教は社会秩序のなかの大切なものを伝えてきたが、その中には必ずしも「人権」とは一致しない面があるということ、どこか念頭において考えなければならぬと思う。他方で、「人権」という概念が西洋社会で成立する基礎には宗教があったことも

重要だ。宗教無しの人権、リベラリズムもその限界も問われているが、要するに、それぞれの人権はみんな違うことを目指しており、それをどう調整するかが政治、というのがリベラリズムの基本である。たとえばLGBTについて今関心が集まっているが、世界の宗教を見渡すとそれは家族を壊すものだという感覚が相変わらず強い。プーチン大統領は、西側の国はそういう方向へ向かっているから、ロシアはそれには一致できないと言っている。アメリカの宗教右翼も同様だ。やはりこれまで尊んできた社会秩序の基礎が、人権の主張によって崩されてしまうという危機感を持つ人たちがいるのは、よく念頭に入れて議論を構築していく必要がある。

私は、旧統一協会が地方に入り込んだのは、2010年代以降ではないかと考えている。従来の絆の在り方を利用してきた自民党の基盤が大都市には無いので、宗教勢力を票集めという点でも頼ったのだと思うが、どうか。

**中野：**私は、もう少し早く、日本会議の成立と重なる90年代後半、小選挙区制が導入され、ライバルよりも1票でも多くとれば当選できる仕組みになり、支離滅裂な集票をやるようになったところで、旧統一協会にとって食いこむチャンスが生まれたのではないかなと思う。その流れで地方議員も生まれていったのではないかな。

**久保：**キリスト教の伝統が大切にしてきた教えの中心に「人格の尊厳」がある。人格とはもともと「ペルソナ」という神学用語だった。憲法学者の樋口陽一先生は、憲法第13条の「国民は個人として尊重される」という条文を、人権の包括的な原則として、憲法の中で最も重要な文章と言っておられる。人間ひとりひとりを大切にするという基本原理を有する点で、キリスト教と憲法は重なっている。とはいえ、日本の教育制度では、キリスト教の教育と憲法・人権の教育は分離されているのが実情だ。そのため、宗教と政治は別領域の事柄と見なされ、キリスト教と憲法はあまり関係がないものとして

受け取られている。両者は人権が保障され、人間が尊重される社会を作るという共通の課題に関わっていると考える必要がある。

渡辺：確かに、カトリック教会もそうだが、宗教団体には、LGBTQ、ハラスメントなど、ジェンダーの問題に対応できていないことが多々ある。それらは個々の意識の問題だけではなく組織として構造的にも変えていくことが喫緊の課題だと思う。一方で公共宗教としての役割、「開かれた教会」で私たちに何が出来るかを考え、自覚して行動することが重要だ。

島藺：自民党と原理運動、旧統一協会には親和性があるが、対立する面もある。自民党右派は日本の独自性、優れた美しい国柄、国体という思想を持っているが、旧統一協会は韓国の優位を主張し、韓国に利益をもっていく団体だ。にもかかわらずこれだけ優遇されてしまったのは、やはり日本、韓国、あるいは東アジア全体に、国家、家族、人間という序列にあるからだと思う。それは深い文化的伝統となっている。西欧の宗教右派とは違う形で東アジアの右派を考えなければならないだろう。文鮮明が生き神様ようになったのは、戦前の日本とどこか近い。そして「人権」を危険なものと感じる感覚がある。なぜなら「人権」は、せつかくまとまっているはずの国家や家族を壊してしまうから、和を壊すから、という認識が根深くある。これを是正していくには、人権を基盤にしてこそよき共同社会を構成出来るということを主張し、身を持って示していくことが必要で、今、宗教団体がその模範になり得るフェイズではないかと思う。

光延：たった8万人しかいない旧統一協会、あるいは日本の政治全体にとっても大きな影響をもつ創価学会に対して、40数万と言われるカトリック教会はいったいどれだけ政治に関わり、影響を与えているのか？日本のカトリック教会は政治にどう向かっていったらいいのか、最後に松浦司教に伺いたい。

松浦：今、憲法が非常に危うい状況だが、日本人のカルトにはまる体質と、今この憲法の状況とはつながっているように感じる。大江健三郎氏は、かつて「この国は、なにかぼんやりしたものでどこかに導かれている」と言っていた。そしてそこに不安や脅威となるものが入ってくると、一つの方向へ一気に流される傾向が日本にはあるように思う。その一つの原因は、自分がよって立つ生き方や宗教をどう選択しているのかがあやふやだからではないか。「みんながどう思うか」とか「波風を出来るだけ立てない」とか「お上に従う」といったことが価値基準になっていたら、自分の考えより、まわりの状況に翻弄されてしまう。宗教者の我々には大きな責任と使命がある。それは、先ほど「公共宗教」という言葉もあったが、なによりも、「人格の尊厳」、そして「共に生きる関係としての平和」について人々に伝える使命だ。キリスト教的な言葉で言えば、福音的な視点とか福音の光に照らして現実を判断し、必要であれば政治に対してであれ、経済に対してであれ、発言し、関わっていくということだ。宗教者の大切な役割は、人格の尊厳や平和を普遍的な価値として示すこと。もちろん、難しい問題もある。今の世界のぶつかり合いを見ても分かるように、価値観が違う人たちにも尊厳（人権）の考え方や生き方があるので、どうやってそれぞれの違いの中でも一つになって歩める部分を共有し、平和をつくっていくか、その辺がこれからの大きな課題だと思う。

#### <主な参考文献>

藤田庄市『宗教事件の内側—精神を呪縛される人びと』（岩波書店、2008年）、桜井義秀、中西尋子『統一教会—日本宣教の戦略と韓日祝福』（北海道大学出版会、2010年）、槌田毅『記者襲撃』（岩波書店、2018年）、副島嘉和・井上博明「これが『統一教会』の秘部だ—世界日報事件で『追放』された側の告発」（『文藝春秋』1984年7月、134-151頁）、川邊克朗「自民党・統一教会・公安警察、「三つ巴の暗闘」の恐るべき歴史」（『現代ビジネス』2022年7月29日）、対談：有田芳生×青木理「統一教会と政治—統一教会の捜査を阻んだのは何だったのか？」（『週刊金曜日』1392号、2022年9月9日）、櫻井慶秀『カルト問題と公共性』（北海道大学出版会、2014年）、ホセ・カサノヴァ『近代世界の公共宗教』（津城寛文訳、玉川大学出版部、1997年／ちくま学芸文庫、2021年／原著は1994年発行）

## 「世界『平和』統一家庭連合」の問題、そして真なる『平和』

(2022年11月24日、主催 日韓和解と平和プラットフォーム)

講師 ステパノ <sup>タク ジウン</sup>卓志雄 (日本聖公会東京教区 司祭)

日韓和解と平和プラットフォームは、日韓の諸問題に関わる宗教者と市民が、現実問題と課題について率直に問題提起し、対話と理解を深めようと2021年秋からオンラインセミナーを行っている。今回は「旧統一協会、韓国と日本」に焦点をあて、統一協会の被害者でもある在日司祭の卓志雄さんにお話しいただいた。抜粋をご紹介します。

父、<sup>タクミョンファン</sup>卓明煥はジャーナリストとしてカルト問題を追っていたが、1994年、統一教（韓国での呼称）に影響されたカルト教団によって殺害された。

統一教は<sup>パクチョンヒ</sup>朴正熙独裁軍事政権下、「勝共思想」で政府から保護を受け、教勢を拡大した。名前を度々変え現在は「世界平和統一家庭連合」となっている。キリスト者が30%いる韓国では異端と言われている。政治家とのつながりもある資産を持った財閥、文鮮明は変な人だが、靈感商法などの被害もないので、問題視されてこなかった。

教祖<sup>ムンソンミョン</sup>文鮮明は1920年生まれ2012年死亡。日本に留学後、韓国に帰り、朝鮮戦争勃発と同時に活動拠点を平壤から釜山に移した。文鮮明が人類の汚れを清くし救いをもたらす。朝鮮半島に統一協会の王国を建設することが目的とされる。

1959年からはアメリカでも宣教し、ベトナム戦争反対に対するカウンターデモを支援した。日本では1964年宗教団体として認可され、1968年岸信介らと勝共連合をつくり保守政治とのつながりを強めた。反面、北朝鮮とも通じ1991年<sup>キムイルソン</sup>金日成と会談、平壤に教会を設立。金日成の指示で生まれ故郷は聖地となっている。平和自動車<sup>ハンハクチャ</sup>を設立した財閥でもある。文鮮明死亡後は母子が分裂、妻の韓鶴子は家庭連合の総裁となり、自分がメシアだとして、神格化されている。

靈感商法は、430代まで遡った先祖の罪を許す

解怨式を名目に、韓国では1万8千円だが日本では140万から1億円で経典を売り付け、活動、聖地建設などの資金としており、1987年から2021年までの34年間で、弁護士会の統計によると相談件数34500件、被害額は1237億円にのぼるといふ。

政治との関係では安倍晋三首相と国際勝共連合の主張が一致するところも多く、自民党の政策に反映されていると言われる。選挙支援を受けていた政治家と、片や布教にお墨付きを与えられ、相互にメリットがあった。

このカルト団体に対し、いま日本では全国靈感商法対策弁護士連絡会など様々な団体が救済活動をしている。NCC（日本キリスト教協議会）は「統一協会（世界平和統一家庭連合）問題に関する声明」を出した。一人の人間を統一協会の枠に取り込むことは、信教の自由を奪う行為。同様に、合同結婚式による家庭に生まれた子どもたち（祝福二世）が抱えている問題は、「信仰的・教育的虐待」でもあり深刻である。

私たちの教会はカルトとは違う、その教義は間違っていると線を引き籠るのでなく、線の外側の今も悲しみと苦しみを抱えた人の存在を忘れてはならない。山上徹也容疑者はカルトによって被害を受けた加害者かもしれない。右翼のヘイトスピーチが在日も統一協会も日本から出ていけと叫んでいる。

教会の役割は人間の尊厳を守ること。彼らに寄り添って悩みを分かち合い、その涙をぬぐいさること。教会が大事にしている「家庭」、「平和」が本来何を語り、何を目指しているのか。彼らが語る「平和」は人の痛みの連鎖を生む。痛みが残り傷を放置したままの和解があるかもしれない。痛みを癒す営みであるか、考え、行動していきたい。

以上まとめ、渡辺多嘉子（東京教区）

## 報告・国際会議「教皇フランシスコ・非暴力・地上の平和の充実」 非暴力は、イエスに従う私たちの道（2022年12月5日～7日、ローマ）

● 弘田しずえ（日本カトリック正義と平和協議会専門委員、ベリス・メルセス宣教修道女会）

昨年暮、国際パックス・クリスティのカトリック非暴力イニシアティブと男子・女子修道会総長連盟のJPICの共催による国際会議がローマで開催されました。「教皇フランシスコ・非暴力・地上の平和の充実」と題した集まりは、アフリカ、中近東、アジア、中南米、北米から75名が参加し、非暴力の実践を教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』、『兄弟の皆さん』、使徒的勧告『福音の喜び』などから深め、イエスの非暴力こそ今日の世界の現実を生きる人間としての道であることを確認する営みとなりました。またバチカンのシノドス事務局次長のSr.ナタリー・ベカーから、シノドスの歩みは非暴力の歩みであることが指摘されましたが、誰も排除しない教会と世界への招きを改めて深める恵みの時であったと感じています。参加者の一人、パレスチナの「パレスチナ紛争変革センター」創業者ディレクター、ズビ・ズビさんのインタビューをご紹介します。

ズビ・ズビ：私は1963年ベトレヘムに生まれたパレスチナのキリスト者で、ベトレヘムに深く根ざしている8人の兄弟姉妹の大家族の出身です。父が6才の時に亡くなり、末っ子の妹は3ヶ月だったため、苦労しましたが、活動家として長年働き、1994年に「パレスチナ紛争変革センター」を創立しました。人間としての市民としての意識、平和構築を諸宗教対話、アドボカシーを通して、困難な道を歩むことを決意したのが、その背景です。非暴力の道を選んだのは、主イエスの教えに従い、すべての人間が神の似姿であると信じているからです。私は、人間と、イスラエルがパレスチナを占領していることを分けて考えます。我々の土地を奪い、生活権を奪う占領に対して抵抗し続けますが、イスラエル人は憎みません。人権の侵害は、日常的



ズビ・ズビさん

で、たとえば私は連れ合いと1990年以来一緒に生活することができなくなっています。彼女は、3ヶ月のツーリストビザを、高額を払って更新し続けなければならないのです。また次男が結婚する時に母親は来ることができず、カトリック教会の高位聖職者に仲介を願い、2万5000ドルを払わなければなりません。戻ったら払い戻すという話でしたが、今でも実現していません。投獄されたこともあります。パレスチナ人は無罪が証明されるまで有罪という英国の植民地時代の悪い法律が引き継がれているため、長い間刑務所生活を余儀なくされました。このような人権無視の占領の現実に対して、私は、非暴力を自分の生き方として選び取りました。キング牧師は「変革のためには、犠牲が必要だ」と言われますが、いつの日か、私たちは兄弟姉妹として、共に生きることができると信じ、希望しています。私たちの闘いに賛同し、支えてくださる多くの人によって、励まされ、力をもらっています。また、多くの人たちにパレスチナを訪問してほしいと思います。



弘田：国際パックス・クリスティの会長であったミシェル・サバ司教（エルサレム主教座）が、以前「日本から多くの巡礼団が来るが、聖地の過去だけ見て現在を見ようとしなさい。日本の巡礼団に、エルサレムに来るなら、私に会ってほしい」と言われたことがあります。

ズビ・ズビ：正義と平和の代表であったサバ司教と共に働きましたが、聖地の歴史を知るだけでなく、今生きている人間の政治、経済、社会の現実に触れてほしいと思います。それは、聖地を訪れる人たちが、パレスチナの支援者になるということよりも、正義において連帯する霊的な繋がりが実現されることを願っているからです。

弘田：パレスチナの人びとは、非暴力をどのように理解しているのですか？

ズビ・ズビ：私たちは、非暴力ではなく「非武装の闘い」という表現を使います。非暴力という言葉は、しばしば「受け身」で現状を維持する否定的な意味に受け止められることがあるからです。実際、私たちの闘いは非暴力で、暴力による抵抗は1%か5%にすぎません。メディアは、パレスチナの闘いを常に暴力的に報道し、パレスチナ人はテロリスト、過激派、原理主義者とされています。確かに、そのような人もいますが、パレスチナ人の大部分が、市民的不服従、非協力など非暴力を生き方として選んでいます。

弘田：1994年にセンターを創立して以来、あなたは非暴力の生き方を実践していますが、どのようにこのコミットメントにとどまり、またどのように現状を見ていますか？

ズビ・ズビ：私は13才の時から非暴力の闘いに取り組んできました。私は、この集まりで出会っているような世界中の正義と平和に取り組む人々から力と支え、希望を与えられます。現

状は、特にイスラエルの新政権の誕生で非常に悪くなっていますが、私たちは人々に不動心、レジリエンス（立ち直る力）を持って生きるように勧め、また、教会を見るとき、あなたのように共感を持って励ましてくれる人びとによって支えられています。

弘田：希望がありますか？

ズビ・ズビ：私はいつも希望を持っています。希望は信仰の問題だけではなく、非暴力の闘いの表れだと信じています。私の希望は、母から受けついで信仰に根ざしています。シングルマザーとして8人の子どもを育て、私たちの教師として、ソーシャルワーカーとして、生き方を示してくれた母です。キリスト者として私は十字架の道行を信じています。13留の歩みは、全ての人権侵害を示しています。土地、行動の自由、生きる権利を奪われ、行き着くところは空の墓、復活であり、それは全ての抑圧に対する勝利を意味しています。

弘田：あなたにとってイエス・キリストとは誰ですか？

ズビ・ズビ：救い主、私の主、信頼し、頼り、私と違う人々に出会うことを示してくれる同郷人です。イエスは、私の生家から2分のところに生まれました。イエスは私に生き方を示す光であり、私が弱く感じる時に力を与えてくれる存在です。

弘田：最後に日本へのメッセージをお願いします。

ズビ・ズビ：私の愛する日本の方々、日本のカトリック教会の皆様、ぜひベトレヘムにいらっしゃってくださいるようにお願いします。2000年前に場所を提供できなかった間違いを正し、ベトレヘムには皆様をお迎えする多く場所があることをお伝えしたいと思います。



## 「良い政治」とショックドクトリン

● 光延一郎（日本カトリック正義と平和協議会専門委員・イエズス会）

「聞く力」が売りだった現首相は、国民の意見には耳を閉ざし、国葬、カルト宗教との癒着、辞任ドミノで求心力が著しく低下しています。それにもかかわらず、ロシアによるウクライナ侵攻に乗じて、いわゆる「ショックドクトリン」（惨事による人々の不安に乗じて熟議すべき問題を一気に進める強権政治）を続けています。憲法や国会など存在しないかのように、閣議決定で「敵基地攻撃（反撃）能力」や、老朽原発の稼働延長、新設も決めてしまいました。コロナ、危機的な国の財政、円安、物価高、家計苦が続く中で、人々が幸せになれるような産業構造の改変や給与増、子育てや福祉、教育、日本国憲法の基本である平和外交には目もくれず、戦争への道ばかり急いでいます。「所得倍増」だったはずの公約は、いつの間にか「軍事費倍増」増税に変わりました。報道の自由度は世界71位だし、会員選考が違法のままの日本学術会議の人事にまで政府が介入して、思想・良心、表現の自由まで脅かそうとするこの国はいったいどうなるのでしょうか？

『兄弟の皆さん』第五章「最良の政治」で、教皇フランシスコは「社会的友愛を生きる民族と国民を起点にした兄弟愛が実現可能な世界共同体の展開を生み出すには、真の共通善に貢献する最良の政策が必要です。ところが残念ながら、今日の政治はしばしば、別の世界へと向かうことを阻む体制をしいています」と言います（154）。私たちカトリック信徒も、政権与党に食い込めとまでは言わないにしても、公正な政治への意識を磨くことがいよいよ求められていると思います。フランシスコはこう言います。「よい政治なくして、普遍的兄弟愛と社会平和に至る有効な道は見いだせるでしょうか」（176）。「狭量で目先のことばかりを求める政治の数々を目にしていますが、忘れないでくださ

い。困難に際して、わたしたちが気高い原則を掲げ、長期的な共通善を思い描くとき、真の政治的手腕が明らかになります。政治権力者たちは、国造りの仕事におけるこうした義務を引き受けることをととてもつらいことだと思うのです」（178）。

フランシスコは人気がありますが、ポピュリズム（大衆に迎合して人気をおおる政治姿勢）ではありません。むしろ民衆（プエブロ）から学ぶ神学です。アルゼンチンの軍事政権下の迫害に対しても、イデオロギー的な解放の神学の方向はとりませんでした。彼の姿勢は次の言葉によく現れていると思います。「民衆という語には、論理的には説明できない何かがあるので。民衆の一員になることは、社会的、文化的つながりから成る共有のアイデンティティの一部となることです。それは自動的なことではなく、反対に、共通の計画に向けての、時間のかかる難しい歩みなのです」（158）。「事実、『民』というカテゴリーは開いているものです。生き生きとした、ダイナミックな、未来ある民は、異なるものを取り入れることで、新たな総合につねに開かれています」（160）。「つまるところ、すべては、人の心、習慣、生活様式を変える必要性に気づくことができるかどうかにかかっているのです」（166）。これぞ、民衆の声に耳を傾ける指導者の姿でしょう。

そして政治の精神の核には愛がなければならぬとします。「優しさをもって愛する機会、政治にもあります。優しさとは何でしょうか。そばに行き、具体的に示される、愛のことです。心から始まって、目に、耳に、手に届けられる動きです。優しさは、もっとも勇敢で強い人々がたどった道なのです」（194）。すべて、岸田首相に聞かせたい言葉ですね。



## ヒバクシャの声に耳を傾ける

市田真理 (第五福竜丸展示館学芸員)

学校や市民グループの学習会などで、ビキニ事件と第五福竜丸についてお話しさせていただく機会があります。その時に、第五福竜丸乗組員に寄せられたお見舞いや励ましの手紙、当時の新聞投書、ビキニ事件に触発されて生まれた詩、長らく声を上げられずにいたたくさんの漁船の乗組員たちの言葉を参加者といっしょに音読するようにしています。時にはそんな「言葉」をまんなかにしたワークショップにもトライしています。

ビキニ事件というと、第五福竜丸だけの被災のように感じてしまいがちですが、あの日＝1954年3月1日、実験場となったビキニ環礁から190kmほど離れたロンゲラップ環礁の人びと、実験場にほど近い島で気象観測や起爆装置を操作していた米軍兵士や技術者たちが、第五福竜丸23名の乗組員と同じ光と死の灰＝放射性降下物に曝されました。その時の記憶が綴られた「言葉」を読んでもらいます。少人数グループに車座になって音読してもらいます。声がさざ波のように押し寄せ、私はその「言葉」の海の中に立つと「あの日」の情景が立体的に立ち昇ってくるような、とても不思議な感覚を覚えます。

3月末まで開催中の企画展「世界のヒバクシャー核開発・核実験のもとで」は、フォト・ジャーナリスト豊崎博光さんの取材に基づく構成で、館内には50人のヒバクシャのまなざしを集めたバナーや、解説、ポートレートと証言によるパネルが船体をぐるりと囲んでいます。

アメリカのネバダ核実験場周辺住民は、核実験の放射性降下物を浴びされたことからみずから「風下の人びと」を呼びます。もちろん旧ソ連やイギリス、フランス、中国の核実験場にも「風下」は存在します。アボリジナル・ピープルのヤミ・レスターさんは南オーストラリア

州イミューで行われたイギリスの原爆実験を目撃します。「巨大で奇妙な黒い霧のようなものが流れてきた。長老が『悪魔だ。大地に穴を掘って隠れろ』と言ったが、その時はもうみな気分が悪くなっていた」と証言しています。

ソ連が核実験場とした北極海のノバヤ・ゼムリャ島の住民、ネネツ族のオレガ・レッドコーヴァさんは船でアルハンゲリスクに買い物へ出かけて帰るときに海に白い煙が立ち上るのを見えています。大きな音も聴きました。その後島の住民は全員、アルハンゲリスクに移住させられ、以後オレガさんは故郷に帰れないままです。

実験だけではありません。アメリカの水爆搭載機がスペインのアロマレス村に墜落した事故は当時も大きなニュースで、文学作品や映画にもなっていますが、アンナ・ペレスさんは「事故のくわしいことや放射能があることなど、まったく知らされなかった。アメリカ軍がやってきて事故機の破片を探させるために子どもたちにチューインガムを配った」と語っています。

さまざまな背景を解説しながらこうした証言を読むワークショップを授業でも取り入れてみました。参加した大学生は、展示を見るだけでなく、自分の体を通して声にすることで、被害者の悲しみや不安が自分のなかで増幅され、生々しく情景を思い浮かべることができた、と感想を伝えてくれました。

原料となるウラン採掘から核兵器製造、実験、放射性廃棄物や降下物などあらゆる過程でヒバクシャを生み出す核兵器。そしてひとたび事故をおこせば取り返しのつかない、原子力発電所などの事故。事実を知りたい気持ちと想像力があれば、どの道を選べばいいのか、おのずとわかると思うのです。ヒバクシャの声に耳を傾けさえすれば、迷っている暇などありません。

特集 宗教と政治

- 1 報告1・座談会  
宗教と政治  
世界平和統一家庭連合(旧統一協会)問題を手がかりに
- 7 報告2・オンラインセミナー  
「世界『平和』統一家庭連合」の問題、そして真なる『平和』  
..... 卓志雄
- 8 報告・国際会議「教皇フランシスコ・非暴力・地上の平和の充実」  
非暴力は、イエスに従う私たちの道..... 弘田しづえ
- 10 (連載第4回)「兄弟の皆さん」とわたしたち④  
「良い政治」とショックドクトリン..... 光延一郎
- 11 (連載第4回)からし種、パン種、空の鳥  
ヒバクシャの声に耳を傾ける..... 市田真理
- 12 まんが 連載第10回「神学生トマス」

表紙写真の説明

2021年2月1日ミャンマーで、軍事クーデターが起きてから丸2年になりました。ミャンマーでは現在も、軍事評議会による民衆の虐殺と弾圧が続いています。

ミャンマーとインドの国境 Zokhawthar (ゾコタル) の検問所付近の様子  
撮影：ジュマ・ネット (2022年8月19日)



苦虫のつぶやき

新たな戦前を許すな!

この政府のやり方を見て、もう怒り浸透です。大体、国会で議論もしないで、首相の一存で閣議決定するというのは、許せない。マスコミも反対というより、ほとんど解説するだけ。基本はいつも私たちが叫んでいる「武力で平和はつくれない」ということです。私は戦前の生まれなので、ちょうどあの時代、軍部が内閣に入って、陸軍省、海軍省が軍縮よりも軍拡をやり出して、軍縮会議を脱退して、国債を発行して、有名な戦艦大和とか武蔵を作ったのですが、今はこれと非常に似ているわけです。何も説明しないで、ただ予算を増やしてアメリカから武器を輸入する。これは近隣の国にとっては非常に大きな脅威になる。「敵基地攻撃」を「反撃能力」と言い換え、沖縄や南西諸島に配備して。これは憲法9条を廃止するのと全く同じだと思うのです。専守防衛を捨てると閣議で決めて、国会の終わりの臨時国会で通してしまっただけです。

今回正平協が安保三文書に対する撤回の抗議声明を出したのは本当に意味のあることだったと思います。本当は日本の司教団が出さないと、平和憲法を維持することをはっきりと司教団も声明しているのだから、それをやらないのはおかしいと思います。

私は戦前に軍国少年として騙されて教育されて、日本がアジア各地に侵略して、大東亜共栄圏なんていう騙した言葉を使って、日本がアジアの盟主になるなんて言い出して、先制攻撃でやったわけです。真珠湾攻撃もそうですし、それ以前に東南アジアにも先に侵略して、マレー沖海戦も先にやってしまったのです。沖縄を捨てて石にして、そして最大の悲劇が広島長崎に起こって、日本が降伏したわけです。その結果、憲法9条で武力の放棄、武力を使わないと公に誓ったにも関わらず、それを反故にしている。それに対して日本の国民は声をあげない。さらにまた恐ろしいことに、最大の悲劇である福島原発を忘れて、原発再稼働、あるいは新しい原発を新しく作ると岸田首相の独断で発表したのです。福島の人たちを犠牲にしてそれに対する補償もしていないということを、考え直さなければいけないと思います。

戦時中は私たちを騙して、広島原発も熱線爆弾とニュースで出してくらいで、原子爆弾だったことを発表しなかったんです。子どもたちは学童疎開という強制的な疎開生活をさせられて、本当に飢えの中で暮らしていました。そしてそれを受け入れた田舎の学校も大変なことになっていたわけです。私たちは、平和憲法を死守するというのをこれからも続けていかなければならないし、抵抗しなければいけないと思います。

大倉一美神父 (東京教区、日本カトリック正義と平和協議会専門委員)



\*大倉神父のスピーチを事務局で編集しました。全文は正義と平和チャンネルをご覧ください。  
<https://www.youtube.com/watch?v=Lo8-NYWrFyM&t=241s>



発行日 2023年2月1日 (隔月発行)  
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会  
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10  
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920  
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円 (送料共)  
郵便振替 00190-8-100347  
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>